

PERSONA STORATOS
ペルソナストラトス

マーボーふえち

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

とある事情により死んでしまった逢崎唯

彼が目覚ますとそこは――

パステルピンク一色のふあんしい？な空間だった

もう一本やってるのですがネタが出てきて我慢できなかつたんです

ただで際遅い更新がさらに遅くなってしまうと思います
遅すぎ付き合ってランねーと言う方すみません
それでもよければお願いします

目次

プロローグ

パイラードライバアアアアア!!

|

1

プロローグ

パイルうドライバアアアアー!!

初めましてそれがしは逢崎唯あいできゆいでございます

・・・ごめんなさいテンパりましたそれでは改めて
初めまして俺は逢崎唯だ。

後、俺はこんな名前だが男だ

間違えないでね？泣くよ？いいの？

・・・それはさて置いてここは何処だろうか？

さつきまで保健室で休んでいたんだけど？仮病で

「ハアアア、元気してるう？」

キョロキョロしてるといきなり背後からイラつとする声でした

振り向くと先程まで何も無かったところに変なぬいぐるみが置いてあった

不思議に思い見つけた

「そんなに見つめないでほしいわあ」

どうやらこの間延びした腹の立つ声はあの人形が発生源らしい

・・・よし解体バラそうか

「ちよ、ちよつと待つてほしいわあ、話があるのよお」

俺が行動に移そうとしたら危機を察知したらしいぬいぐるみが何か言い出した

「知るか。通信機かなんか知らんが話があるなら直接来い」

「分かったわあ。元の姿になるから3秒ちようだあい」

そういうとぬいぐるみが煙を噴き始めた

は？ 本当の姿？ 何だ？ 実はとんでもない美人さんでしたとか？

煙が晴れるとそこには

筋骨隆々のオッサンがいた

「これでいいかしらあ?」

そのオッサンから野太い声が発せられた

・・・さっきの口調で

つかなんでブーメランパンツ? エグイわボケ

さっきのぬいぐるみの方がマシだな

「どうしたのかしらあ?」

「・・・きもち」

「ひどいっ」

「いやだつて、ねえ」

「なによお、なにがきもいのよお」

全部です。しかし嫌な予感がしたので言わないでおいた

「悪い。それよりここ何処だか知らない？」

「知ってるわよお」

「教えてくれたりする？」

「イイわよお。さっきの”きもい”を撤回してくれたらねえ」

「これがきもくない分けないだろ・・・まあ仕方ないか

「悪かった、さっきのきもいは撤回する」

「何か嫌々つて感じがするわねえ、まあいいわあ。

「まずはあなたの状態から話す必要があるわあ」

「俺の状態？」

「何でそんなこと話す必要があるんだ？」

「あなたは死んだのお」

「は？」

「だからあ・・・」

「いやまて俺は死んでんのか」

「さつきそうだったでしょお」

「なら何で俺の意識があるんだ」

「そんなのあたしがあなたを呼んだからでしょお」

「何個か質問いいか？」

「イイわよお」

ありがたいなきもいけど

「まず何で俺は死んだんだ？」

「あなたの担任の女教師がいたでしょお」

「ああ、いたな」

チビで横幅がやべえ上にアレな感じの奴が

「その人実はあなたのストーカーでねえ」

マジかよあのクソ○タ女・・・

「それであなただ保健康室で寝てたでしょお」

「ああ」

「そこにあの人が来てあなたを見つけたのお」

「それで？」

なんの関係があるんだ？

「無理心中しようとしたのよお」

「・・・」

最悪過ぎて言葉がでない

「結局死んだのはあなた一人で担任は自殺未遂捕まって豚箱ぶちこまれたわあ」

ハッ。(。ロ。)

「ブ〇は豚箱へ!？」

「中々それはうまいわねえ

ごみはゴミ箱へみたいな感じで」

そんなわけねえだろ

「うん、まあ死因は最悪だけど分かった。

じゃあ何で俺の意識があるんだ？」

ぶっちやけこつちの方が気になる

何で死んでんのに意識あんの？

死んだらそれで終わりじゃね？

「そうねえ。そもそもこつちが本題だしねえ」

「本題？」

「そうよお。あなた転生する気ないかしらあ」

てんせい?!

「転生?」

「そう転生よお」

「そうか、転生か」

って待て

「転生!」

「そうよお」

「そんなこと出来るのか!」

「そりゃあ出来るわよお、だってあたし神様だし。」

特典もつけられるわよお」

「マジで? 何で転生させてくれんの?」

実は俺、転生のss暇さえあれば読むほど好きだったんだ

「あなたが面白そうだったからよお」

「マジか!? ヨツシヤア!! さっきもいとか言っでごめんなさい!!

あんた最っ高だな!」

「そんなに喜んでくれると思わなかったわあ」

「で?! どんどこに転生させてくれるんだ!」

「少し落ち着きなさい」

「おつ、おう悪いはしやぎ過ぎた」

「それでねえ転生先なんだけどお・・・」

・・・ゴクリ

思わず唾を飲み込む

「IS—インフィニット・ストラトス—よお」

「・・・」

「マジで?」

「マジよお」

嘘おあそこ面倒臭そうだなあ

まあアレに殺^やられた世界何かよりはいいか

「それで何か特典つけるかしらあ」

「ああ頼む」

「どんなのがイイかしらあ?制限とかは考えなくてイイわよお」

「マジで?じゃあ——」

そして俺はずっと前から憧れていた

ゲームの主人公の事を口にした

それは

ペルソナ3ポータブル

「俺のP 3 P 男主人公のデータと同じスペックと見た目お願いします!!」

「イイわよお」

その承諾を得てじわじわと俺の体を歓喜が包む

「ただしい」

「ただし?」

「ペルソナ能力は世界観に合うように少し変えさせてもらおうわあ

あとコミュに関しては自分で頑張ってもらおうしかないわあ」

チツ、けどそれぐらいは仕方ないか

「いいよペルソナ事態が全く使えなくなる分けじゃないんだよね」

「そうねえ使い方は変わるけど使えなくなる分けでは無いわあ。」

「ならいいよ」

「他には無いかしらあ」

「特にないかかな?・・・あつと」

「どうしたのかしらあ」

「名前、逢崎唯のままに出来ないかな」

「どうしてえ?その名前コンプレックスじゃなかったかしらあ」

「そうだけどここの名前は俺の親が付けてくれたんだ。」

大切な宝物なんだと俺は言った

「女の子と間違えられるのは苦手だけどね」

神と名乗ったオネエっぽいオッサンはその目を見開いている

「ああもうっ。あなた気に入ったわあ!! ついでに最高の環境も用意してあげるう!!」

びっくり何かすっげえ気に入られたっぽい

「それで名前は大丈夫なわけ?」

「もちろんよお!! それぐらい無理でも通してあげるわあ!!」

「ありがと、オッサン」

「もうっオッサンじゃなくてお姉さんと呼びなさい」

「アリガトウ。汚^おネイサン」

「何かバカにされた気がするわあ」

すまない。感謝はしてるが見た目と口調が生理的に無理だ

「気のせいじゃない?」

「そうかしらあ」

「そうだよ」

「そうかしらあ? まあそろそろ時間だし別にいいわあ」

「時間?」

「そうよおそろそろ転生してもらおうわあ」

やべっ超楽しみだ

「転生後は赤ちゃんから始まるから頑張つてねえ」

「分かった!」

「それじゃあ行くわよお」

「ああ。頼む!!」

「ハアアア、チエストオオ!!」

「ぐふっ」

な・ぜ・パ・．．．イルド・．．．ら・．．．い・．．．ばあ・．．．?

その思考を最後に俺の意識は途絶えた

「次に目が覚めれば転生してるわあ♪」

今度は幸せになってねえ唯ちゃん♪

あなたみたいなイイ子は幸せになってほしいからねえ♪」

神と名乗ったオツサンは俺にパイルドライバーをかけてそう言う霞のよう消えた

そして俺はきもいオッサンのパイルドライバーによって第二の人生を歩み始める事と相成った